

---

# 雷様

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

雷様

### 【Nコード】

N7775C

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

昔のお話。雨の日に突然雷様が家にやって来て。聊斎志異からヒントを得たお話です。

## 第一章

雷様

誰でも子供の頃には言われたことだろうが雷が鳴る時に腹を出していると言われるという。俗に言う迷信であるが広く伝わっている話だ。

実際にあるかどうかという迷信である。しかしこうした話も残っている。嘘か真かは今となっては確かめる術はないがこの話が残っているのは確かである。

駿河の国、今で言う静岡県の話だ。丁度茶摘みの季節で人々は忙しい日々を送っていた。

駿河は豊かな国で米の収穫もよく茶の他に蜜柑も採れる。何かと実入りのいい国であり東海道にもあり何かにつけて金が入ってくる国であった。

しかも幕府の天領なので税も軽かった。幕府は他の藩の範とならんとして年貢等を軽くしていたのだ。その為この茶にしる蜜柑にしるかなりの収益が民百姓のものとなっていたのである。

周吉とおたみの若い夫婦もそうした茶で大きな儲けを得ている者達の一つであった。まだ若いというのにその家は中々の大きさであった。食べるものにも困らず朝から米の粥を食べていた。茶や蜜柑も当然ながらあり天領の百姓として豊かな生活を楽しんでいたのがあった。

その茶摘みは今日の分は終わった。夕刻風呂で汗を流し夕飯前に少しくつろいでいた。

木綿の服を着て炉辺に向かい合って座わっていた。そこで茶を飲みながらこれからのことについてあれこれと話をしていたのである。

「今日であらかた終わりか」

「そうだね」

おたみはその丸い顔を周吉に向けて答えた。その手の中には今年

雷様

生まれただかりの赤子がいる。男の子だ。

「今年は茶がよく獲れたね」

「ああ、豊作だな」

周吉はそのことにまずはにこにことしていた。右の膝を立ててそこに肘を置いて茶を飲みながらの話であった。姿勢もかなりリアックスしたものであった。

「いい感じだ」

「その分忙しかったね」

おたみは笑いながらまた声をかけた。その先には周吉の少し痩せた顔がある。おたみの顔を日とすれば周吉のそれは月のようであった。

「おかげで肩が凝ったよ」

「そうか？」

「そうさ。子供だつて生まれただかりだし」

そう言いながら自分の手の中の子供を見る。見ればすやすやと眠っている。

「何かと大変だったよ」

「しかしこれでまた今年も随分と儲かるぞ」

周吉は金の話をしだした。

「おかげでな。茶が売れる」

「お茶と蜜柑は本当に何があっても売れるね」

「特に茶はな」

江戸時代はあらゆる産業が発達して多くのものが広まった時代であるがその中でも茶は特に広まったものの一つである。それまで長い間非常に高価なものであった茶が瞬く間に人々の口に入るようになったのだ。日本文化の根幹の一つとも言えるものであるがその茶が定着したのは江戸時代以降である。それを考えるとこの茶の定着は案外遅いものであるのだ。

「売れて売れて仕方がない」

顔を崩して笑う。

「江戸の人達が盛大に飲んでくれるからな」

「そうだね。江戸の人達に足を向けて寝れないよ」

おたみも笑って亭主に返す。子供を時折あやしなから。

「何かとね」

「そうだよな。んっ？」

「どうしたんだい、御前さん」

「いや、天気かな」

窓の向こうの少し暗くなってきた空を見上げ出した。

「何か悪くなってきたと思ってるな」

「そういえばそうだね」

おたみもそれに気付く。天気は見る見るうちに悪くなっていく。

そのうちに雲が厚く黒いものになっていき雨が降り出したのだった。

「もう降ってきたな」

「仕事遅くまでしないでよかったね」

おたみはまずはそのことにほっとした。雨に遭っては洒落にならない。雨を見ながらそれに遭わなかったことに安心していたのである。

「そうだな。それで晩飯は何だい？」

「雑炊でどうだい？」

「雑炊か」

「米のね。あと色々入れてね」

「悪くないな、そりゃ」

それを聞いて頬を緩ませる。彼は雑炊が好きなのだ。それも米の雑炊が好きだ。味がもつともソフトで食べやすいからだ。そこに色々を入れて食べるのである。

「もう少ししたら作るからね」

「頼むぜ。坊主の面倒は俺が見とくからな」

「頼むよ。しかしねえ」

空を見て言う。雨はどんどん強くなっていた。激しい音を立てて土砂降りの雨が降る。地面は川のようになりそれでもまだ降ってい

る。

そのうえ雷まで鳴ってきた。周吉とおたみはそれを見て顔を顰めさせた。

「今度はこれか」

「お臍隠すかい？」

「といつても俺もおめえもちゃんと服着てるじゃないか」

そう女房に返す。

「坊主だな、後は」

「大丈夫だよ、ちゃんと隠しているから」

子供を見せて言う。見れば布で奇麗に覆われている。何も心配は要らない格好だった。

周吉はそんな自分の子供を見てにこりと笑う。その後で言った。

「じゃあ安心か。臍のことはな」

「そうだね。雷様が落ちて来ない限り」

ここで稲光がする。しかし二人はそれを見ても平気だった。

「そんなことあるもんか」

周吉はそれを聞いて笑った。笑ったところで一際大きな雷が落ちた。黄色い光の後で轟音が辺りに響き渡る。本当に雷神が落ちて来たかのようにだった。

「凄かったな、今は」

「凄いなんてものじゃなかったよ」

今の中には二人もかなり驚いていた。それだけとんでもない光と音だったのだ。

「今のはちよつとね」

「本当に雷様でも落ちて来たのかね」

「まさか」

亭主のその言葉は一笑に伏す。

「そんなことはないよ、幾ら何でも」

「そうだよな」

「そうだよ、やっぱり」

流石にこれはないと思った。ところがだ。それがあるのが世の中のとんでもないところだった。そう、その幾ら何でもないことが起こったのであった。

「頼もう」

いきなり玄関の方から声がした。二人はその声を聞いて顔を見合わせる。

「お客さん!？」

「こんな雨の時に」

二人は顔を見合わせて言い合う。まさかこんな時に客が来るとは思わなかったのだ。それも当然で外は呆れる位の雨と雷だ。それで客とは、誰もが思うことだった。

「どうしよう、御前さん」

「といつても放っておくわけにもいかないだろ」

この雨だ。濡れて困っているに決まっている。それで放っておくのは周吉も本意ではなかった。

「とりあえずは入れてあげないとな」

「そうだね、やっぱり」

おたみもそれに頷く。これで決まりであった。

「じゃあな」

周吉がゆっくりと立ち上がり女房に声をかける。

## 第二章

「ちょっと見て来るな」

「済まないね、御前さん」

「いいってことさ。子供抱えてるしな」

女房に顔を向けて笑って述べる。その後で玄関に行く。暫くするとその玄関から驚きの声があがってきた。それがあまりにも大きいので思わず子供が目を覚ました程だ。

「どうしたんだい、一体」

「どうしたもこうしたもねえよ」

周吉の声が玄関の方から聞こえてくる。おたみはそれを聞いて首を傾げさせた。

「鬼でもいたのかい？」

「来てみればわかる。というか来い」

「さっきと言ってることが逆じゃないのかい？」

そう言うがそれでも周吉は言うのだった。その声がまたかなり真剣なものだった。

「それでもいいから来いっ」

周吉の声はさらに焦ったものになった。

「いいから」

「全く。どうしたんだよ」

子供を座布団の上に置いてから立ち上がって玄関の方に向かう。するとまた雷みたいな声が家の中に響いたのであった。

「な、何だよこれ！」

「だから言っただろうが」

周吉は思いきり開いた瞳孔で女房に返す。

「物凄いいことになってるってな」

「物凄いつてもんじゃないよ」

おたみも亭主に言い返す。顎が外れそうにまでなっている。

「何でこんなところにいるのよ」

「さてな」

「まあとにかくじゃ」

その驚かれている客人が二人に対して言ってきた。今まであまりにも驚く二人の前に何も言えなかったが頃合いを見て声をかけてきたのである。

「よければ仲に入れてくれんか」

「あつ」

「そうだった」

二人も彼に声をかけられやっと相手がお客さんだということを出した。

「用があつて来られたのですよね」

「うむ」

周吉に対して答える。

「その通りじゃ。それでな」

「まずは中ですね」

「よかつたらな。頼めるか？」

「ええ、どうぞ」

周吉は彼に家の中に入るように薦めてきた。

「ここじゃ何ですから」

「お茶でも飲みながら」

おたみも言ってきた。こうして二人は彼を家の中に入れて炉端を囲んで話をはじめたのである。それでも驚いたままで彼を見ているのだった。

その客人の姿はあまりにも異様なものであった。赤い身体に恐ろしい顔、黄色く逆立った髪に虎の禪、そして背中には無数の小さな太鼓を持っている。言うまでもなく雷神であった。だからこそ二人は彼を見て驚きを隠せないのである。

「どうぞ」

おたみから茶が出される。雷神はそれを受け取った。

「かたじけない」

座布団の上で正座している。そのうえで茶を受け取り飲みはじめた。

「美味しいのう」

茶を飲んでまずはこう述べてきた。

「いい茶じゃ。流石は駿河じゃな」

「まあそうですが。しかし」

「聞きたいことはわかっておる」

周吉に言葉を返す。

「あれじゃろっ？どうしてわしがここにいるか」

「はい」

周吉は雷神の問いにくくりと頷いた。外では雨がまだ降り注いでいるが雷は止んでいる。それを鳴らす本人がここにいるからであるうか。

「落ちたんじゃよ」

雷神はバツの悪い顔でこう述べてきた。

「上からな」

「上からですか」

その顔で空を指差したその先を見上げて二人は言う。何かは無しを聞いただけではとても信じられないような話だった。嘘のような話とは思えない。

「そうなのじゃ、うっかり雲の上からな」

「それはまた厄介ですね」

「うっむ。こんなことははじめてじゃ」

周吉にそう答える。

「足を踏み外してまっ逆さまにな。痛い何のじゃ」

「それでお怪我は」

「ああ、それはない」

おたみに述べる。

「わしは神様じゃからな。全く平気じゃ」

雷様

「平気ですか」

「死ぬことはない。絶対にな」

今度は大きく口を開いて笑う。その顔はかなり豪快で頼もしいものであった。その顔を見るとあまり怖そうには見えない。むしろ親しみすら感じるものであった。

### 第三章

「しかし。痛いことは痛いじゃ」  
それは言う。

「暫くは打ち身に悩まされるな」  
「それでどうされるのですか？」

周吉はまた困った顔になった雷神に問うてきた。怪訝そうに彼の顔を窺っている。

「どうとは？」

「ですから空に戻られるのは」

「ああ、それが」

それを言われて思い出したような少し素っ頓狂な顔を見せる。

「それじゃな」

「戻れるんですよね」

「一応はな」

周吉に対して答える。右手に湯飲みを持ってそれを口に近付けながら。

「戻れるぞ。心配をかけて済まぬな」

「いえ。それでどうして」

「それにはな。実は頼みがあるのじゃ」

困った顔を見せてきた。

「頼みですか」

「うむ」

二人に対して言う。急に目を閉じ何かを考える顔になってきた。

「そうじゃ。その頼みとはな」

「ええ」

「それは一体」

「風呂を借りたい」

その言葉は二人にとってはあまりに意外な言葉であった。これま

でで一番目を丸くさせてきた程である。流石に言葉もなかった。次の言葉さえ出ない。

「よいか」

「あの」

おたみが驚きながら彼に尋ねてきた。

「お風呂なんですよね」

「左様」

大きく頷いて応えてきた。

「何故それが」

「地上に落ちたな」

「はい」

それは見ればわかる。現に彼は今ここにいる。それが何よりの証拠である。

「それで地上の穢れを受けたからな。これでは空に戻れんのじゃ」

「そうだったのですか」

「はあ」

二人はそれを聞いてようやく納得した。納得はしたがやはり何と云っていいかわからない。

言葉に詰まっている。しかし雷神は実に気兼ねなく言うのである。

「褒美は弾む」

「褒美ですか」

「そうじゃ。じゃからな、風呂を借りたいのだがいいか？」

「ええ、まあ」

そんなことなら問題はない。周吉もおたみも特にこれといって考えることなくそれに頷いた。

「済まぬのう、それでは早速」

「火を沸かしますんで」

「それとな。米ぬかも頼む」

おたみに答える。この時代は米ぬかで髪を洗っていた。言うならばシャンプーにしていたのである。江戸時代の人々はかなり清潔で

あつたのだ。少なくとも当時のフランスと比べれば隔絶たるものがあつた。

「完全に穢れを落とさぬと戻れぬからのう」

「意外と大変なんですね」

「偉いさんがな。五月蠅いのじゃ」

困つたような笑みを浮かべて述べる。

「そうしたことにはな。神たるもの穢れていてはならぬと。穢れていては妖怪と同じじゃとな」

「そこまで言われるのですか」

周吉はそれを聞いてかなり厳しいものだと感じた。しかし神様ならばそれも当然かも知れないと話を聞きながら思つたりもした。

「左様、これでわかつたな」

「はい」

「では借りるぞ」

そう言うつとすぐに立ち上がってきた。すぐにも穢れを取り落としたいようである。

「すぐにな」

「わかりました。それでは」

すぐに風呂が用意された。風呂を用意するのは周吉の役目でおたみは夕食の支度に入っていた。それぞれ忙しい夕刻になっていた。

暫くして風呂の用意が整つた。周吉が窓の外を見ている雷神に声をかけた。

「入りましたよ」

「うむ」

その言葉に従い風呂場に向かう。そうして己の穢れを落とすのであつた。

「お湯加減はどうですか？」

周吉は風呂場の外から雷神に尋ねた。何か鼻歌まで聞こえてくる。それを聞くとかなり機嫌がいいのがわかる。少なくとも悪くはなさそうだ。

「よいぞよいぞ」

雷神の機嫌のいい返事が返ってきた。

「風呂を入れるのが美味しいのう」

「有り難うございます」

「よい感じじゃ。これで空に帰られるわ」

「後で夕食も如何でしょうか」

「夕食とな」

雷神はそれを聞いて声をあげた。これは流石に予想していなかったのか驚いた声が風呂場の中から聞こえてきた。

## 第四章

「はい、雑炊ですが」

「よいのか？そこまでされるのは」

「いえ、いいですよ。なあおたみ」

「ああ、いいよ」

炊事場からおたみの返事が返ってきた。気分がいい返事であった。

「そう思ってたっぶり作ってるからね」

「そういうことなんで」

「済まぬのう」

雷神はそれを聞いて感謝する声を返してきた。

「そこまでしてもらって」

「いえいえ、困った時はね」

しかし周吉は雷神に笑って言葉を返す。屈託のない愛想のいい声であった。周吉は村でも善良な男で知られる。これは雷神にとって幸運なことであった。

「お互い様ですから」

「わしでもか」

「そうですよ」

雷神に対して述べた。

「それが何か」

「いや、わしはこのような外見じゃからのう」

声に苦笑いが入ってきた。実際に雷神は鬼そのものの姿である。かなり怖いのは事実だ。

「じゃからなあ。子供に怖がられたりしてな」

「はあ」

「これでも気にしておるのじゃ。わかるかのう」

「何となくですけれど」

「しかしじゃ」

だが雷神はここで言う。笑いながら述べてきていた。

「御主等の子供は特に怖がらなかったな」

「というよりはぐっすり眠ってしまいましたので」

「ふむ」

周吉のその言葉を聞いて少し納得したようであった。どちらにしろ悪い気分ではないのは確かなようであった。それは今の言葉でわかる。

「左様か」

「はい、それだけです」

「じゃが凄いいことじゃぞ、わしを見ても眠れるのじゃからな」

それだけで凄いいことであった。雷神を前にしてぐっすり眠られるというのならば。彼もそのことに感心しているのである。

「よし」

そのうえで決意してきたようであった。

「風呂から上がった時を楽しみにしておれ」

「わかりました」

暫く風呂に入る。それが終わってからのことだった。禪をはいて上機嫌で二人の前に戻る。そうして雑炊を食べた後で空に戻るようになった。

「それでは褒美じゃな」

「褒美ですか」

「約束じゃからな。まずは」

窓の外を見る。相変わらず雨が降り続けている。しかし雷はない。それを見ていたがやがて立ち上がって窓の方に向かったのだった。

「むん！」

窓の外に向けて雷を放つ。それは空に向かって放たれより一層大雨となったのだった。雷神はそれを見て満足そうに頷いた。

「これでよし」

「あの、どうなったんですか？」

「これでこの村はずっと豊作じゃ」

強くなつた雨を見て満足そうに頷く。

「これが褒美の一つじゃ」

「何と」

「いいのですか？そんなことを」

「よい。助けてもらった礼じゃ」

笑つてそう答える。周吉とおたみの方を見て満足した顔で笑つていたのである。

「この程度はな」

「有り難うございます、どうも」

「そこまでして頂いて」

「いやいや、これで終わりではないぞ」

礼を述べる周吉とおたみに対してまた言ってきた。

「御主達の子供じゃが」

「うちの子が何か」

「男の子じゃったな」

「ええ、まあ」

周吉は雷神に答える。答えながら言うのだった。

「ならば話が早い。それでは」

子供の方を見てバチを取り出す。そうしてまた雷を放つて周吉達の子供に対して当てたのだった。

「雷をですか」

「うむ、子供に千人力を与えた」

胸を張つてそう告げる。また満足そうな顔をしていた。

「将来は必ずや力士になり名を馳せるであろう」

「力士ですか」

「とにかく力は千人力、きつと役に立つ」

力強い声で述べる。述べながらじつと子供を見ている。

「これが褒美じゃ。というよりは御礼じゃな」

「何か凄いものを二つも貰いました」

「何と言えればいいか」

「よいよい」

雷神は笑ってそう返す。

「全ては礼じゃ。気にすることではない」

「左様ですか」

「うむ。この子供のこれからを空から見守っておるぞ。さて」

ここでその空を見上げた。何時の間にか雨が止んで晴れようとしていた。

「わしは帰るとしよう。それではな」

「ええ」

「ではお元気で」

「最初はどうなるかと思ったが。よくしてもらった」

雷神は二人を見てにこりと笑った。こうして見れば実にいい顔である。愛嬌があつて悪いものはそこにはない。

「それではな」

雷神はすうつと上にあがつてそのまま空に消えていく。空に消えると暫くして雷鳴が聞こえて黄色い光が空に見えた。それが別れの挨拶になった。

周吉とおたみの村は豊作で沸くようになった。二人の子供は力士として大成し江戸で知らぬ者がない程にまでなった。それが雷神のおかげであることは広く知られ村では長い間雷神が信仰された。

雷神 完

2007・4・10

雷様

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

### PDF小説ネット発足にあたって

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7775c/>

---

雷様

2009年7月1日21時21分発行